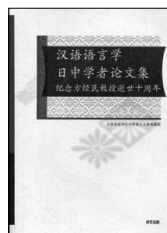


「方経民教授逝去十周年記念論集」 に思う

中川 正之



漢語語言学日中学者論文集編輯組
漢語語言学日中学者論文集
紀念方経民教授逝去十周年

B5判 292頁
好文出版
[本体 4000円 + 税]

この論文集は二〇〇四年九月七日に違法運転による交通事故故にまきこまれ五〇歳の若さでこの世を去った方経民君の逝去一〇周年を記念し、日本と中国の研究者が研究会を開き、その折に発表された論文を中心に、篤学で誠実な、そしてあの早逝さえなければ、まだまだ日本と中国、いや世界で活躍していたであろう方君を悼むものである。方君の遺稿となった「上海方言空間区域範疇及其表達方式的語法化」を巻頭に、論文二五編、詩文八編、それに理系少年であった方君が「文革」の波にのみこまれ最後に華東師範大学に入学するまでの自伝的エッセイ「我考大学」、巻末には方君の研究者述一覧、方君の夫人鄭麗芸女士の「群賢念故友、宏文譜新曲——緬懷方経民」を含むA4版二九二頁にも及ぶ大著である。

故方経民教授のことを「方君」と呼ぶのは、ただ歳が上な

だけの私のようなものにまでに終始礼儀正しく、どんな些細な質問にも丁寧に応えてくれた故人との関係を誇らしく思うからである。私は七〇歳を超えた現在でも、死後の世界や靈魂の存在を信じる気にはなれないが、この論文集を通読すると、方経民教授の魂が、この世に、我々の心の中に存在していることを認めざるを得ない。いやこれだけの論文集を結実させた凝集力のようなものを、人は魂と呼んできたのであるうかという気さえする。中国語学を専門とする、あるいは専門としようとする人たちは、この魂の書を購入し、目を通すべきである。

二五篇の論文を紹介するのが本文に課せられた使命であるうが、私はまずこのような論文集を出版した好文出版、論文集の書評を書くよう勧めてくれた東方書店に感謝したい。私

は、日本の中国（語）研究は、このようなけっして大規模とは言えない出版社に支えられていることを強調しておきたい。私自身も白帝社や内山書店なども含めて、このような出版社に育てられたという思いがある。ここですべての出版社を挙げることはできないし、余計なお節介だと言われるかも知れないが、中国語学習者の激減と日本人が本を読まなくなつた、専門家や専門家になろうとする人さえ書籍を購入することがなくなつたことなどから、これら書店の経営は決して楽ではないだろうと推察する。これらの出版社が少なくなつたということは、我々の研究成果の発表の場が少なくなつたことに直結している。あえて購入を呼びかける所以である。

さて、この論文集であるが、すべてを紹介する余裕もない。ここではこの論文集編集出版の中心的役割を果たされた古川裕氏の「漢語和日語対（流動（物））的認知特点及其表達特点」に触れ、残りは方君の思い出と空間認知に関する研究について私見を交え紹介したいと思う。

古川論文は、同じ現実を「どう捉えるか（construal）」という認知言語学的立場から次のような日中両国語の差を問題にする。

（J-1）川上から大きな桃が流れてきました。

（C-1）*河上流过来了很大的桃子。∥从河的上游漂来

了很大的桃子。

当論文の「概要」をかいつまんで紹介する。

一、中国語は液体のみが流動物と捉えられるのに対して、日本語は、液体以外にも気体や音声や抽象名詞も「流れるモノ」として捉えられる。

二、「桃・橋・トイレ」なども「流れる／流す」と言える
三、日本語はメタファーとメトニミーにより意味拡張を行うが、中国語ではメトニミーによる意味拡張が少ない。

三は古川論文の結論とも言える部分であるが、「流動物」に関してのみそういう傾向が見られるのか、さらに一般的傾向なのか、様々な事例にあたつて考察を広げることが期待される。たとえば、日本語の「落ちる／落とす」と中国語の《落》ではどうなのか？ ごく最近も中国人留学生から「なぜ日本人は財布を落とすというのか？ 中国語なら《丢》です」と言われた。何を「落（下）物」と捉えるのか彼等の言語差を記述し、認知言語学的あるいは類型論的に一般化できれば大きな研究になるであろう。

一九八八年～一九八九年の間に私は北京にいた。はるか昔のことなので間違っているかもしれないが、当時たまたま手にした若手研究者が書いた論文集にあった邵敬敏氏の結果補語に関する論文に興味を持って、会つて話がつたと思った。

そこで、古川裕氏（当時北京大学に留学中）に、私の滞在しているホテルまで邵敬敏氏を連れてくれるようお願いした。大学院を出たばかりの若手の研究者だと思いきや、いたからである。実際には、私とはほぼ同年齢であった。氏はその後何度か私の滞在先まで訪ねて来てくれ、話し合った。話の中でよく出てきたのが方経民氏と袁毓林氏であった。袁氏は当時北京大学博士課程に在学中であった。朱德熙先生の大学院の授業で話をしたことがあるが、その時、一番鋭い質問をしてきたのが袁氏であった。邵敬敏氏の話ぶりでは方君もなかなか優れた研究者であるということであった。そして日本に行くというところに行っているかということであった。中国でも第一線に立てる中国語研究者や日本語研究者、言語学者の中で日本に本拠を移す人が出始めたところである。方君にも、私のことは伝わっていたのであろう、日本に帰国して間もなく、多分夜おそくだったと思う、方君から電話があった。寝ほけていたせいもあり、方君の言っていることがなかなか理解できなかったことは覚えている。

方君の関心事はきわめて広範囲である。本論文集所収の馮勝利「方経民二〇〇三年『漢語書面語研究計画的』的現状与未来」によると馮氏と書面語に関する歴史的研究も含めてかなり具体的な計画があったことが窺われる。しかし、ここで

は方位に関する遺稿「上海方言空間区域範疇及其表達方式的語法化」と、方君の方位研究について少しく考えてみたい。卷末の業績一覧によると一九八七年にから逝去まで一〇本を超える方位に関する論考を公表しており、氏のライフワークであったと言っても過言ではないと思うからである。

遺稿は、他の所収論文とはフォントも異なり、恐らく学会発表用のハンドアウトをそのままコピーしたものであると思われる、そのことだけでも方君の急逝が改めて感じられる。時間制限のある学会発表用のものであるためかなり圧縮されている。しかも考察範囲が上海方言のみならず周辺の方言や上海方言の古い形にまで及んでいる。方氏の中ではさらに書きたいことがあっただろう。圧縮されているだけに難解な部分も少なくない。以下、私の特に興味を引いた部分のみをいくつか挙げて紹介することにする。

一、トコロ表現が連用修飾語になる時《学生们刚才在『学校／学校里』上课》のように《里》が任意であるが、文頭に立つときは《『学校／学校里』，学生们刚才上课》のように《里》は必須成分になる。しかし、上海方言ではこの場合も任意であるという指摘はすでにあるが、方氏はトコロ名詞が三音節では普通話と同様《里》が必須成分になることを指摘している。

二、モノ名詞をトコロ名詞として使うためには《上・里》などの方位詞や《这儿・那儿》などの指示詞の付加が必須になる。指示詞は当然のことながら遠近の使い分けがあり、近づくことを表す《来》と遠ざかることを表す《去》とは共起制限がある。《到我这儿来》は問題ないが、《到我这儿去》は成立しない。同様に《到他那儿去》は自然であるが、《到他那儿来》はやや不自然ということになる。しかしそれに相当する上海方言では、これらいづれもが自然であると言う。その原因について方氏は、上海語の《这儿・那儿》に相当する語は文法化が進み、指示作用が弱くなっているせいだとする。

私が学部で学生であったころの購読の時間に出てきた《他等在那儿》を「彼はあそこで待っている」と訳したところ、恩師の伊地智善継先生が、作者は上海人であるので《那儿》には「そこ、あそこ」のような意味はなく、「彼は待っている」と訳すべきだと言われたことを思いだした。

三、方位詞《上・下、里・外》の非対称性、つまり《上・里》のほうが《下・外》よりも出現頻度が圧倒的に多いという呂叔湘の指摘を受けて、方氏はそれを虚化の程度差とし、とくに《里・外》ではその差が顕著で《感情里》のような抽象名詞に《外》が付加することはないとしなが

らも、《除……外》は例外とし、《除这种思想外，除这个故事外》を挙げる。マクロな視点をもちつつミクロな現象も見逃さないいかにも方君らしい指摘だと思う。

残された紙幅の中で、本論文集を離れて、方君の方位研究の出発点の一つになったと想像される、日中両国語における「左右」の認知差について触れておきたい。私は方君といえば、「上・下、外・中、右・左」と口角泡をとばしていた姿を思いだす。その中で、ある対象物をランドマーク（参照物）の右と言う場合、日本人が対面式に言うのに対して、中国人は対象物そのものの右側（以下、側物式という）とする傾向があると主張していたことが印象的である。方経民「論方位参照的構成要素」（『中国語学』一九九三年二四〇号）では、中国人一四六名中一二九名が側物式であったとアンケート結果を報告している。同じような事態を郭鋭氏は「方位詞『前、後、左、右』的参照策略」（『中国語言学論叢』二〇〇四年第一輯）では九五名中三八名が側物式、五七名が日本語と同様の対面式と報告している。両者のズレについて木村英樹氏は、「中国語文法研究にみる認知言語学の成果と課題」（『中国語学』二〇一一年二五八号）で以下のように述べている。

（方氏、郭氏）両者の調査実験は、一見同様の状況を対象にしているかに見えるが、実はそうではない。郭氏の実

験は、参照物と目標物を目の前にしてリアルな現場に立脚する話し手の知覚的な空間のあり方を問うものであり、方氏の調査は、リアルな現場に立脚しない話し手が、自らの知識を頼りに心の中に描く（中略）光景を対象にして行う概念的な空間認識のあり方を問うものである。この違いは話し手の立脚点の設定の仕方に大きく関わる。

この木村氏の指摘は要点を突いていると思うが、これもここ一〇年の認知言語学の進歩によるところが大きい。発話者が体感している度合いによって、表現や文の容認性に差がある、ということが様々な点で明らかになってきている。方氏がこの議論に参加していればと思うと、氏の不在感が切実なものとなって胸に迫ってくる。

（なががわ・まさゆき 神戸大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授）

国際シンポジウム「非発掘簡の資料価値の確立」

▼日時：3月11日（金）13時00分～17時30分（開場12時30分）
▼会場：日本女子大学目白キャンパス新泉山館2階 国際交流センター会議室（東京都文京区目白台2-1-8）1日
本女子大学目白キャンパス 03-393-3131 ▼基調報告：谷中信一（日本女子大学） ▼学術報告：劉国忠（清華大学）／学術報告非発掘の簡帛及其学術価値、名和敏光（山梨県立大学）／北京大学漢簡《掇輿》と馬王堆帛書《陰陽五行》甲篇《掇輿》の対比研究、趙平安（清華大学）／清華簡《子儀》的性質・国別和時代特徴、谷中信一／清華簡《伍》『命訓』の思想と成立 ▼総合討論：司会 池澤優（東京大学大学院教授） ▼主催：科研「Multi-Disciplinary Approach」による新出土資料の総合的研究 ▼共催：日本女子大学文学部・同大学院文学研究科・東文研班研究「中国古代文献の成立に関する多角的研究」 ▼連絡先：日本女子大学文学部谷中研究室内「出土文献と漢字文化研究会」事務局 03-5981-3533 E-mail: yanaka2014@akken@yahoo.co.jp ▼要旨：本シンポジウムでは「非発掘簡」を研究する上での問題点を整理し、それが有する資料価値を考古学・歴史学・言語学・哲学・宗教学等の多角的視座から考察検討し、中国・戦国秦漢時代の社会の様相を総合的に解明することを目指します。☆入場無料☆事前申し込み不要☆通訳付き☆終了後、懇親会予定